

上下のメタファーの観点からみた動詞「あがる」の意味構造分析

——内省分析法の確立をめざして——

森 山 新

1. はじめに

基本動詞は言語使用において重要な位置を占めるが、その多くは多義性が高いため習得が難しい。したがって基本動詞の習得には辞書などの教材開発が重要となるが、その際に問題となるのがその多義構造の記述である。従来多義構造の分析はもっぱら専門家の内省に委ねられることが多かったが、分析結果が専門家間で一致しないことも少なくなかった（森山、2015）。認知言語学の観点（Langacker、2008）からしても、そもそも脳内に表象として形成される意味構造は、言語話者の言語使用が反映しているが、それぞれの言語話者の言語使用が完全に一致するはずがない以上、脳内に形成される意味構造が専門家間で一致しないのはある意味当然のことである。しかし語の意味はその言語共同体で共有されていてこそコミュニケーションが成り立つわけで、その意味では語の意味はその言語共同体内である程度同一のはずである。上述した内省による分析の間に見られる意味構造の不一致も詳しく調べてみると、実はこうした言語話者間の個別性のほかに、その分析方法や記述のしかたなどの不備によるものも少なくなく、その不備を改善することで、ある程度見解の不一致は解消していくことができると思われる。

また、こうした意味構造をひとたび辞書などで公開する際に、辞書間で異なった意味構造を提示するのでは、それを利用する者に混乱を引き起こす可能性がある。とりわけその言語を母語としない学習者にとってはなおさらのことで、その言語共同体で共有される意味構造の典型（プロトタイプ）を提示することは意味があると思われる。

こうしたことから、最近では、心理実験など、不特定多数の母語話者の言語使用を反映させた意味構造研究が登場している（森山、2015）。しかしながらそこでは、内省分析、心理実験の双方に長所があると同時に、どちらにも短所があることも明らかになっており、それぞれの手法でその信頼性を高めることが求められている。心理実験のほうは、その後の研究（大西、2015；山崎、2015；森山他、2015など）で、心理実験の改善方案が徐々に示されつつあることから、本稿では、内省分析法の確立のほうに焦点を絞ることにした。具体的には、これまでの内省分析による意味構造研究を再度検討することで、内省分析の残された課題を抽出し、動詞「あがる」の場合を例に、あるべき内省分析法を確立することを目的とする。

動詞の意味構造の分析にあたっては語義の分類もさることながら、語義間の拡張関係とその動機づけを明らかにすることが重要である。ここでいう「動機づけ」とは、語義Aから語義Bが拡張した場合、それら語義間の拡張関係を示したものである。例えば「子どもが屋上にあがる」と「子どもが小学校にあがる」を比べた場合、前者の「あがる」の意味には空間的な上方移動を伴うが、後者ではそれが無い。しかし後者では、「小学校」を「上位」の教育機関と考えており、そう考えれば同じく空間的上方移動ではな

いものの、メタファー的な上方移動の意味を見出すことができる。すなわちここでは、上方移動の類似性が見出され、この「類似性」が前者から後者への「動機づけ」となっている。またここで用いられる「メタファー」とは、このような「類似性」に動機づけられた意味拡張のことをさしている。

この意味拡張のメタファー的な動機づけに、ある一定の構造を与えているのが「概念メタファー」(後述)である。本稿では動詞「あがる」を取り上げるが、それは以下で詳述するように、「あがる」の意味拡張の多くが「概念メタファー」の1つ「上下のメタファー」によると考えられるためである。したがって「あがる」の分析を通じて、同様な動詞、すなわち上下などの方向性に関わる動詞の意味構造研究において、意味拡張の動機づけを体系的に分析する道が開かれ、内省分析の方法論の確立に寄与しうると考えたわけである。

2. 先行研究

このように、本稿で用いる理論的枠組みはLakoff & Johnson (1980) の「概念メタファー」である。Lakoff & Johnson (1980, 邦訳版, p. 3) によれば、われわれの日々の営みにおける「概念体系の大部分はメタファーによって成り立っている」とし、このメタファーがわれわれの日々の営みに構造を与えているメタファーであるとした。これが「概念メタファー」である。例えば《ARGUMENT IS WAR (議論は戦争である)》は、われわれが「議論」と「戦争」との間に類似性を見出し、「議論」を「戦争」という概念を用いて構造を与え、理解していることを示している。例えば「領土をめぐる争う」と「法案をめぐる争う」では、「争う」の意味が異なるが、これは「概念メタファー」の考えを用いれば、本来の「武力」を用いる「戦争」の領域の語を用いて、「言論」を用いる「議論」の領域の事態を表現しており、「戦争」の領域から「議論」の領域へと語義が拡張していると考えることができる。

Lakoff & Johnsonによれば、概念メタファーには、「構造のメタファー」「方向づけのメタファー」「存在のメタファー」があるという。上記の《ARGUMENT IS WAR (議論は戦争である)》は「構造のメタファー」の1つで、抽象的な「議論」を具体的な「戦争」の構造で捉えたものである。一方、本稿で扱う「あがる」は「方向づけのメタファー」の1つ「上下のメタファー」に深く関係しており、「本来は非空間的な経験を「上下」などの位置関係として概念化するもの」である。「方向づけのメタファー」には「上一下」のほか、「内一外」「前一後」「着一離」「深一浅」「中心一周辺」が含まれる(谷口, 2003, pp.18-20)。

Lakoff & Johnsonは、英語における「上下のメタファー」には(1)のようなものがあるとしている(例文で「上下のメタファー」に関係している語はイタリックで表記している)。

(1)

①HAPPY IS UP; SAD IS DOWN 例) I'm feeling *up*.

②CONSCIOUS IS UP; UNCONSCIOUS IS DOWN 例) Get *up*.

③HEALTH AND LIFE ARE UP; SICKNESS AND DEATH ARE DOWN 例) He's at the *peak* of health.

④HAVING CONTROL or FORCE IS UP; BEING SUBJECT TO CONTROL or FORCE IS DOWN 例) I have control *over* her.

⑤MORE IS UP; LESS IS DOWN 例) The number of books printed each year keeps going *up*.

⑥FORESEEABLE FUTURE EVENTS ARE UP (and AHEAD) 例) All *up* coming events are

listed in the paper.

- ⑦HIGH STATUS IS UP; LOW STATUS IS DOWN 例) He has a *lofty* position.
 ⑧GOOD IS UP; BAD IS DOWN 例) Things are looking *up*.
 ⑨VIRTUE IS UP; DEPRAVITY IS DOWN 例) He is *high-minded*.
 ⑩RATIONAL IS UP; EMOTIONAL IS DOWN 例) The discussion *fell* to the emotional level, but I *raised* it back up to the rational plane.

例えば、①では「よい気分」がupで、②では「目が覚める」ことがupで示されている。このように「上下のメタファー」とは、「非空間的な経験」、例えば「気分の変化」や「意識化」が「空間的な上下を表す語」で示されるような概念化を指す。Lakoff & Johnson (1980, 邦訳版, pp.18-19)によれば、メタファーは非空間的概念に空間的方向性を与えるが、メタファーとして使われるこのような方向性は恣意的なものではなく、われわれの肉体的経験と文化的経験に基づいているとしている。

そしてこのようなメタファーが肉体的、文化的な経験を介して得られるものであるとすれば、人間としての肉体的経験に基づく、言語を超えた普遍性ととも、文化的経験に基づく相違が生じ、方向性のメタファーの具現化についても、文化差が見られるとして、日本語の「上下のメタファー」に関し、(2)のような日本語に特有の上下のメタファーの例を挙げている(谷口、2003、p.28)。

- (2) ①《首都(都)は上、それ以外の地方は下》例) 上京する
 ②《感情的なことは上、感情的でないことは下》例) 舞台に出て上がってしまった。

一方、鐘・井上(2013)は『聞蔵Ⅱビジュアル』という『朝日新聞』の記事データベースなどから用例を収集し、「日本語の上下のメタファーの詳細な種類、経験的基盤及び全体的な体系構成と特徴」を実証的に明らかにしている。

その結果、(3)のように「数量」「時間」「順序」「属性(物理的属性・社会文化的属性)」「状態(生理的状态・心理的状态・事件の状态)」「評価」の6つに分類し、さらに22の下位カテゴリーに分けている。《 》は上下のメタファーの内容を、「 」は具体例を示す。例えば、「時間」では「早くなる」ことが「上げ(繰り上げ)」で示され、「評価」の例ではサービスが「良くなる」ことが「上(向上)」で示されている。ただし(3)ではできるだけ「あがる」が用いられているもの、それに近いと思われる例を挙げている。

- (3)
 数量：《量が多いことは上、量が少ないことは下》「値上がり」
 時間：《早い時間は上、遅い時間は下》「繰り上げ償還」
 順序：《内容が前であることは上、内容が後ろであることは下》「上旬」
 属性：(1)物理的属性；
 《音響が高いことは上、音響が低いことは下》「声のトーンを上げた」
 (2)社会文化的属性；
 《社会的等級が高いことは上、社会的等級が低いことは下》「上司」
 《人徳・気品が高いことは上、人徳・気品が低いことは下》「上品さ」
 状態：(1)生理的状态；

《健康な状態は上、病的な状態は下》「体調も上向き」

《生の状態は上、死の状態は下》「起死回生」

(2)心理的状态；

《意識がある状態は上、意識がない状態は下》「早起き」

《楽しい状態は上、悲しい状態は下》「悲しみの底からはい上がる」

《尊大な状態は上、謙虚な状態は下》「孤高」

《感情的状態は上、理性的状態は下》「にぎやかにつき上がる」

(3)事件の状态；

《公的状态は上、私的状态は下》「上演」

《まとまった状態は上》「全力を挙げて」

《未知状態は上、既知状態は下》「浮動票」

《完了状態は上、完了前の状態は下》「焼き上がった魚」

《影響される状態は下》「戦時下の学校生活」

《支配される状態は下》「植民地支配下」

《正しく機能する状態は上、正しく機能しない状態は下》「事務局の立ち上げ」

《知覚できる状態は上、知覚できない状態は下》「批判が上がった」

《知覚できる状態は下》「災害が降りかかる」

評価：《良いことは上、悪いことは下》「市民サービスの向上」

一方、認知意味論の観点から「あがる」の意味構造を分析したものには、太田（2008）、金（2012）、プラシャント編（2013）などがある。しかし太田では「上下のメタファー」について、「参考になる」（p.67）としながらも、分析にほとんど生かされていない。金でも先行研究で「上下のメタファー」が取り上げられているが、意味拡張などの分析においてはあまり用いられていない。プラシャントでは「上下メタファー」に関する言及は一切ない。そのため、これらの研究では拡張義の分類や動機づけの決定が一貫性のないものになってしまっている。

例えば金（2012）では、語義が4つに分けられているが、別義1（中心義）では「2階にあがる」「部屋にあがる」などの空間的上昇に加え、「小学校にあがる」などの「属性（社会文化的階級）」に含まれると考えられる拡張義が含まれ、別義2では「水からあがる」「手があがる」などの空間的上昇に加え、「気温があがる」「腕があがる」などの「数量」に含まれる拡張義が、別義3では観察者に「見られる」という共通性から、「リングにあがる」「食卓にあがる」といった空間的上昇を含むものに、「話題にあがる」「歓声があがる」といった「状態（事件の状態）」に含まれるはずの拡張義が含まれている。

言うまでもなく、「あがる」は上下のメタファーと非常に密接に関わっている。したがって本稿では鐘・井上の枠組みに基づき、「あがる」の用例を1つずつ見ていき、どのような概念的な拡張が起きているかを分析する。さらにそこから、本来空間的な移動を表す「あがる」の意味が、「上下のメタファー」によりどのような意味へと拡張しているかを考察することで、内省分析に「上下のメタファー」など、「概念メタファー」の枠組みを用いることの有効性について検討していくことを目的とする。

したがって研究課題（RQ）は以下の通りである。

RQ1 「あがる」の意味拡張は「上下のメタファー」で説明できるか。

RQ2 説明できるとすれば、どのような意味拡張が起きているか。

3. 研究方法

上述の(3)を見ると、日本語の「上下のメタファー」で「あがる」が例に挙げられているものは、複合動詞「V+あがる」を含めても、数量の《量が多いことは上、量が少ないことは下》「値上がり」、状態の《楽しい状態は上、悲しい状態は下》「悲しみの底からはい上がる」、《感情的状態は上、理性的状態は下》「にぎやかにつき上がる」、《完了状態は上、完了前の状態は下》「焼き上がった魚」、《知覚できる状態は上、知覚できない状態は下》「批判が上がった」の5カテゴリーにとどまっている。複合動詞を除けばわずかに1つである。したがって、改めて「あがる」の用例をできるだけ網羅的に集めるところから開始する。用例は、国立国語研究所とLago言語研究所が開発したNINJAL-LWP for BCCWJ (<http://nlb.ninjal.ac.jp>)で「あがる」を検索して集めた。「あがる」で検索した結果「上がる」8162文、「あがる」2327文、「揚がる」177文がヒットした(2015年7月8日アクセス)ため、これらの例文研究対象とし、鐘・井上のそれぞれの分類に合致する例を収集した。同時に、鐘・井上の枠組みに収まらないものがあれば、その分類を修正した。

4. 研究結果

研究の結果、鐘・井上のカテゴリーには用例が見出されたものと見出されなかったものがあった。また、鐘・井上のカテゴリーにないものが4つあった。以下具体的に見ていく。

4.1 数量

《量が多いことは上、量が少ないことは下》のメタファーは(4)のように、比較的様々な例文が見受けられた。

(4) 気温／湿度／値／値段／率／価格／株価／血圧／体温／金利／数／量があがる

4.2 時間

時間から上下へのメタファーは、例文が見当たらなかった。

4.3 順序

順序から上下へのメタファーに関しては、わずかに「順位」を表す(5)が《内容が前であることは上、内容が後ろであることは下》の例として見受けられた。

(5) 順位があがる

4.4 属性

4.4.1 物理的属性

物理的属性から上下へのメタファーについては、《音響が高いことは上、音響が低いことは下》に(6)のようなメタファーが見つかった。

(6) 音／語尾／トーンがあがる

4.4.2 社会文化的属性

社会的文化的属性については《社会的等級が高いことは上、社会的等級が低いことは下》に関し、(7)のような階級自体が主語になるものと(8)のように階級を属性とする人が主語になる例文が見ついている。さらに(9)のような待遇表現（謙譲語・尊敬語）などに見受けられる意味拡張《目上の方は上、目下の方は下》もある。

(7) 地位／学年／クラス／ステータス／ポジション／学歴があがる

(8) 小学校／四年生にあがる

(9) 座敷／お迎え／屋敷／御所／にあがる、アイスクリームをあがる

一方、《人徳・気品が高いことは上、人徳・気品が低いことは下》については、コーパスでは検索されなかったが、(10)は例文となりうると考えられよう。

(10) 品があがる (YOMIURI ONLINE「大手小町」より、
<http://komachi.yomiuri.co.jp/t/2010/0720/332438.htm?g=01>、2015年8月22日アクセス)

4.5 状態

4.5.1 生理的状态

《健康な状態は上、病的な状態は下》に関しては(11)が該当する。

(11) コンディションがあがる

4.5.2 心理的状态

《意識がある状態は上、意識がない状態は下》では(12)が、《楽しい状態は上、悲しい状態は下》では(13)、《感情的状態は上、理性的状態は下》では(14)が該当すると思われる。(1)-(10)で示したように、「感情的なこと」は英語では「下」であったが、日本語では「上」で概念化されている。この点は「上下のメタファー」をはじめとした概念メタファーの概念化が言語によって異なることを示している (谷口、2003)。

(12) 意識があがる

(13) テンション／ボルテージ／気分／意気／士気があがる

(14) 試験場／人前であがる

4.5.3 事件の状態

《公的状态は上、私的状态は下》ではあまり例文が見出されなかったが、(15)のように「アップロード」の意味で用いられる例文が見出された。《完了状態は上、完了前の状態は下》では(16)のような「終了」を示すもの、(17)のように「完成」を示すもの、(18)のようなフライや天ぷらができあがるものが見出された。(17)(18)はともに完成だが、(18)の場合、「揚げ物」はその字「揚」が示すように、完成する際に油の中で浮いていき、油の中から取り出す「油の中からその上へ」の上方移動が「あがる」が用いられる動機づけに作用している可能性がある。《知覚できる状態は上、知覚できない状態は下》では、(19)のような視覚での出

現による知覚、(20)のような聴覚での出現による知覚、(21)のような意見の出現による知覚、(22)のような情報の出現による知覚、(23)のような利益等の出現による知覚など、様々なものが見出された。

- (15) 動画がニコニコにあがる、サイト／ネットにあがる
- (16) 雨／梅雨があがる
- (17) 写真／原稿／ネガがあがる
- (18) トンカツがあがる
- (19) 煙／火の手／炎があがる
- (20) 歓声／悲鳴／叫び声／笑い声／銃声／叫び／音があがる
- (21) 声／要望があがる
- (22) 話／名／名前／報告／名声／問題／候補／例／犯人／【人名】／情報があがる
- (23) 収益／利益／業績／売上げ／実績／収入があがる

4.6 評価

《良いことは上、悪いことは下》では(24)のようなさまざまなものが見受けられた。

- (24) 効果／成果／成績／効率／価値／評価／実効／運／知名度／人気／相場／質／待遇があがる

4.7 その他

鐘・井上では挙げられていないが、以下の4つは今回新たに発見されたものである。

4.7.1 空間

まず地球を眺める時我々は通常、北を上を考える。これは客観的空間というよりは、地図を見るといった我々の日常的な経験により慣習化した上下の感覚である。そのような主観的空間においては、《北は上、南は下》というメタファーによる意味拡張が起きている。例文としては(25)のようなものが見出された。また、戦場や競技など、戦いの場では、《敵陣・前線は上、自らの陣営は下》といったメタファーが存在する。例文としては(26)のようなものがある。これを反映してか、戦場や試合を図示する際には、敵陣や前線を上に描くのが普通となっており、そのような日常的経験もこのメタファーを定着させている。

- (25) 緯度／台風があがる、北にあがる
- (26) 最前線／ボランチがあがる、サイドをあがる

4.7.2 順序

順序から上下へのメタファーでは、《内容が新しいことは上、内容が古いことは下》といったメタファーによる例文として、(27)のようなものが見出された。

- (27) バージョンがあがる

4.7.3 状態

状態から上下へのメタファーでは、《正しく機能しない状態は上》というものとして、(28)のようなものがある。「バッテリーがあがる」は完了とも見受けられるが、同じ意味拡張と考えられる「息があがる」は、完了とは考えにくい。ため、両者に共通する《正しく機能しない状態は上》といった概念メタファーを新設した。

ここで1つ注目すべきこととして、「評価」では「良くなる」ことが「あがる」で示されるが、この場合は「正しく機能しないこと」、つまりどちらかといえば「悪くなる」ことが「あがる」で示されている。心理的状态では「上下のメタファー」で何を上とするかは言語によって異なっていたが、同じ言語でも動機づけによって異なり、時として相互に矛盾する場合もあるのである。

(28) 息／バッテリーがあがる

4.8 空間的用法

プロトタイプ義となる、空間における上方移動を表す空間のカテゴリーの用法として、単なる上方への空間移動の用法(0)以外に、以下(表1)の(0a)～(0f)のような用法も見られた。

(0a)は(29)のような家や部屋の中に入る用法である。日本の家屋は家の中が地面より高く、入室の際に上方移動を伴うことから、メトニミー的な意味拡張の例である。メトニミーの意味拡張とは「近接性」に基づく意味拡張である。ここでは「入室」に「上方移動」が近接的に伴い、「入室」を近接の「上方移動」で表しているのである。(0b)は(30)のような食卓に料理などが出される用法で、食卓は床に比べて高いところにあることから「配膳」を表すのに「あがる」が用いられたもので、これも近接性に基づくメトニミー的な意味拡張と考えられる。ただしここには「食卓に登場する」という意味もあり、4.5.3で述べた「知覚による出現」の意味も関わっているとも考えられる。(0c)は(31)のように水中から水上、もしくは水中から陸上への上方移動に特化した用法である。このように一般的な「あがる」の概念で「水中から陸上へ」という、ある特化された概念を表す場合の意味拡張の動機づけを「シネクドキ」と言う。そのため、(0c)はシネクドキ的な意味拡張である。(0d)は(32)のような用法で、もともとそれぞれの活動の場所が他の場所に比べ高いところにあることが「あがる」が用いられる動機づけであろうが、4.5.3のメタファー的拡張で見たように、その活動場所を公的場所としてとらえ、そこに現れ(視覚的出現)、役割を果たしている点に「あがる」の意味の中心が移動しており、メタファー的拡張も含んだメトニミー的拡張である。さらに、(0e)は前述4.7.1の(25)のように、地球上(北半球)における北方移動を表すメタファー的意味拡張である。(0f)も前述4.7.1の(26)のように、戦争・競技などの攻撃的空間における前線への移動を「あがる」で表している。この用法は空間的用法であるが、上下でなく平面の空間が、重要性に基づき《重要な方が上、そうでない方が下》に定められ、主観的に再解釈されており、メタファー的拡張であると考えられる。その結果、空間ではプロトタイプ義を含めて7種類となった。

(29) 客があがる 家／縁側／居間／室内にあがる

(30) 食卓にあがる

(31) 水死体／魚／ウミガメ／ボート／兵が(海から陸に)あがる 岸／島にあがる 風呂／海からあがる

(32) マウンド／リング／土俵／教壇にあがる

5. 総合的考察

以上を表にまとめたものが表1である。

空間的用法は上述した7週類である。非空間への拡張的空間では、「順序」「事件」で新たに1つずつカテゴリが追加されたほか、「事件」のカテゴリで細分化が起き、その結果、「数量」で1種類、「順序」で2種類、「属性」では、「物理的属性」で1種類、「社会的属性」で2種類、「状態」では、「生理的状态」が1種類、「心理的状态」が3種類、「事件的状态」で10種類、「評価」で1種類の、合計21種類の意味カテゴリが形成されていた。「時間」のカテゴリでは例文が発見されなかった。また、ほとんどの用法では研究課題の通り、「上下のメタファー」で説明できたが、プロトタイプ義の空間的な拡張用法内では、同じ「空間」をドメインとしているため、メタファーではなく、近接性に基づくメトニミーや、特殊化によるシネクドキを拡張の動機づけとしているものもいくつか見られた。また「空間」自体が主観的に再解釈された「上下のメタファー」の用法も見られた。

6. まとめ

以上、内省分析法の確立を目的とし、「上下のメタファー」の観点から、動詞「あがる」の意味拡張について、メタファーの意味拡張を中心に考察してきた。その結果、プロトタイプの「空間」のカテゴリ以外の拡張義は、どれも「上下のメタファー」の観点から意味拡張を説明できた。「上下のメタファー」の動機づけには、鐘・井上で述べられていないものもいくつか発見できた。一方、プロトタイプ義の「空間」カテゴリ内では、メトニミー、シネクドキによる意味拡張、さらには空間を主観的に再定義することで意味が拡張するメタファー的な意味拡張が見られた。

Lakoff & Johnson (1980, 邦訳版, p.20) には、「メタファーとして使われるこのような方向性は恣意的なものではない。それらは、われわれの肉体的経験と文化的経験に基づいている」とあるように、「上下のメタファー」などの「方向づけのメタファー」は、肉体的経験を基盤としているがゆえに言語を越えた普遍性があると同時に、文化的経験に基づいているために個別性も有していた。普遍的な部分は言語を越えた側面であるため、そのような概念メタファーが関わる語の内省分析を行う際、意味構造や意味拡張の動機づけを考察するための普遍的な枠組みを与えてくれる。同時に、このような普遍性と個別性は第二言語の習得にも影響を及ぼす (Littlemore, 2009)。普遍的な部分は日本語でもその他の言語でも共通する意味拡張の動機づけとなっている可能性があり、第二言語として日本語を学ぶ学習者が日本語の意味拡張を考える上でその動機づけを理解するのにさほど困難は感じないであろう。これに対し、個別的部分は、日本語を第二言語として学ぶ学習者にとっては、理解が難しい可能性がある。したがって「上下のメタファー」などの概念メタファーの導入は、本稿の目的である内省分析の方法論の整備だけでなく、第二言語としての日本語の意味構造の習得を考察する際にも役立つと言えそうである。

今後の課題としては、今回「あがる」で明らかになったことは上昇を表す動詞「あげる」「のぼる」、逆の下降を表す動詞「さがる」「くだる」「おりる」などでも同じように言えるのかについても明らかにし、多義語の内省分析において「上下のメタファー」の枠組みを用いることが有効なのかについても明らかにしていきたい。さらには「内外」「前後」「着離」など、他の「方向づけのメタファー」の場合にも広げていき、内省分析の確立に寄与できればと思っている。

表1 「あがる」の意味拡張

カテゴリー	下位カテゴリー	起点>目標	例文
0 空間	空間		煙が、頭が、花火が、手が、幕が、水位が、額が、あごが、右手が、肩が
	家屋	0a 上>家の中	客が、家に、縁側に、居間に、室内に
	食卓	0b 上>食卓の上	食卓に
	水陸	0c 上>陸	水死体が、魚が、ウミガメが、ボートが、兵が、岸に、島に、風呂から、海から
	活動空間	0d 上>活動の場	マウンドに、リングに、土俵に、教壇に
	地球（北半球）	0e 上>北	緯度が、台風が、北に
	攻撃的空間	0f 上>前	最前線が、ボランチが、サイドを
1 時間	時間	1 上>早	—
2 数量	数量	2 上>多	気温が、湿度が、値が、値段が、率が、価格が、株価が、血圧が、体温が、金利が、数が、量が
3 順序	前後	3a 上>前	順位が
	新旧	3b 上>新	バージョンが
4 属性	物理的	4a 上>高音調	音が、語尾が、トーンが
	社会的	4b 上>社会的等級高	〈昇級〉地位が、学年が、クラスが、ステータスが、ポジションが、学校に、中学に、年長に、軍に、一軍に 〈尊敬〉座敷に、お迎えに、屋敷に、御所に、アイスクリームを
		4c 上>上品	品が
5 状態	生理的	5a 上>健康	コンディションが
	心理的	5b 上>意識	意識が
		5c 上>楽	テンションが、ボルテージが、気分が、意気が、士気が
		5d 上>感情的	試験場で、人前で
		事件	5e 上>公的
	5f 上>終了		雨が、梅雨が
	5g 上>機能停止		息が、バッテリーが
	5h 上>完成1		写真が、原稿が、ネガが
	5i 上>完成2		トンカツが
	5j 上>視覚可		煙が、火の手が、炎が
	5k 上>聴覚可		歓声が、悲鳴が、叫び声が、笑い声が、銃声が、叫びが、音が
	5l 上>意見出現		声が、要望が
	5m 上>情報出現		話が、名が、名前が、報告が、名声が、問題が、候補が、例が、犯人が、情報が、【人名】が
	5n 上>利益出現		収益が、利益が、業績が、売り上げが、実績が、収入が
6 評価	評価	6上 >良	効果が、成果が、成績が、効率が、価値が、評価が、実効が、ランキングが、運が、知名度が、人気、相場が、質が、待遇が

注) 一部、コーパス以外から引用したものが含まれている。

参考文献

- 太田真由美 (2008) 「「あがる」と「のぼる」、及び「おりる」「さがる」「くだる」「おちる」の意味分析」『日本認知言語学会論文集』 8、66-74.
- 大西はんな (2015) 「多義動詞「みる」の意味構造—心理実験によって内省分析を検証する—」お茶の水女子大学大学院修士論文 (未公刊)
- 金秀珍 (2012) 「「あがる」と「のぼる」の意味拡張の様相」『日語日文学』 55、5-22.
- ブラシャント編 (2013) 『日本語学習者用基本動詞ハンドブックの作成』、東京：国立国語研究所
- 鐘勇・井上奈良彦 (2013) 「日本語における上下メタファーの体系構成及びその特徴に関する一考察」『言語文化論究』 30、13-26.
- 谷口一美 (2003) 『認知意味論の新展開：メタファーとメトニミー』、東京：研究社
- 森山新 (2015) 「日本語多義語「切る」の意味構造研究—心理的手法により内省を検証する—」『認知言語学研究』 1、138-155.
- 森山新・大西はんな・山崎香緒里・鐘慧盈 (2015) 「基本多義動詞の意味構造、及び習得との関係についての実証的研究」『JCLA CONFERENCE HANDBOOK 2015』、18-34
- 山崎香緒里 (2015) 「日本語母語話者と英語母語話者の基本動詞CUTの意味構造の違いについて—心理実験を用いた実証的研究—」お茶の水女子大学大学院修士論文 (未公刊)
- Lakoff, G., & Johnson, M.(1980) *Metaphors we live by*. Chicago ; London, United States: University of Chicago Press. (邦訳) 渡部昇・楠瀬淳・下谷和訳 (1986) 『レトリックと人生』、東京：大修館書店.
- Langacker, R. W. (2008). *Cognitive Grammar: A basic introduction*. Oxford, United Kingdom: Oxford University Press.
- Littlemore, J.(2009) *Applying Cognitive Linguistics to Second Language Learning and Teaching*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.

本研究は、文部科学省の科学研究費基盤研究(C)「基本多義動詞・形容詞の意味ネットワークとその習得・教育に関する実証的研究」(平成25~27年度、研究代表者：森山新、課題番号25330168)の助成を受けて行われたものである。